

環境問題における地域性—熱帯から信州を考える

渡 辺 隆 一

信州大学教育学部志賀自然教育施設

Environmental Problems from a Regional Perspective

Ryuichi WATANABE

Faculty of Education, Shinshu University

熱帯林問題は今や全世界的な関心を集めている。その減少が世界の気候に及ぼす影響というばかりでなく、この地球上で最も多様で豊かな自然が失われようとしていることに対する恐れもまた大きいのである。しかし、その実態は熱帯地域の自然、政治、経済、社会、慣習などが多様に関連し、見る視点によりその問題点の理解、対策に大きな相違が生じる。実際に熱帯地域にくらしてみても、その複雑さと規模の大きいこと、同時に、先進国からの保護の視点もまたかなり一方的であることを知った。

今、あらゆることが環境問題として一括されている。しかし、熱帯林問題に典型的にみるように、先進国が一方的にその保護を主張し、当該国はそれを盾に他分野での援助を要請するといった、地域間の争点が幾つも出て来るようになった。本来環境は人とその生活とを包み、支えてきたものである。それが今、地域間の大きな争点になろうとしている。現代の地球上の「水争い」ともいえるだろうか。しかし、ある地域の犠牲の上に他の地域の環境が守られるのでは真の解決とは言えない。例えば、CO₂排出による地球温暖化の原因の多くは先進国にあり、その削減無しで、熱帯の緑を増やしても問題は解決しない。その点で後進国の排出権の要求にも一理がある。かように、環境問題にみる地域間格差とはつまるところ、南北の経済問題に転嫁されようとしている。つまり環境は金になると言うことである。その構造は実はまた日本という一国の中においても、信州という地域の中にさえ見いださうな問題なのではないだろうか。熱帯が、信州のような離れた地域とどのように関連し、どう理解しうるのであるか、そうした視点から、熱帯林問題について論じてみたい。

インドネシアの東カリマンタン州にある熱帯降雨林研究所に一年間滞在し、森林生態の研究、技術移転をおこなってきた。ほぼ赤道直下、1960年代には広大な原生林が広がっていたと言うこの地域も、今は見渡す

はるか彼方まで伐採跡地やその後の焼き畑地、やぶ山である。初期の伐採は日本の商社によるものだったと言う。その時に伐採調査に入っていた人が14年ぶりに再訪し、かつての森のあまりの急速な変わりように驚いていた。数字的にも森林率は日本よりやや低いくらいで、もはや原生林はかなり山奥に行かないとみることはできない。交通もより不便なため、「緑の摩境」は少々滞在では見ることもかなわない「秘境」となってしまった。私が見た場所を例にすると、地元研究者の案内で、州都サマリダから船で1日、役所の許可と移動で1日、翌日2時間の歩きでやっと本当の原生林に入ることができた。研究者は道のない地域にはまだまだたくさんの原生林が残っていると言うが、川を搬路にする商業的伐採はあらゆるところに進入しており、本当に手つかずの森はもはや日本と同様、極めて少ないのである。

熱帯林の保護の必要性は言うまでもないが、誰のためにかとなると実際は難しい、地元のためか、先進国のためか、将来の人類のためか、地域性や未来の問題が顔を出す。地元と言っても、伐採される森にすむ住民か、ジャワなどからの政策移住してきた人たちが、森とは直接には縁のない町に住む多様な人々か、役人達か、立場によって森はまったく異なった価値を持ってくる。例えば、熱帯林の減少を図式的に解説すれば、商業伐採による林道によって土地無し住民が容易に進入し、本来は再生するはずの二次林が焼き畑になり、やがては放棄されて、奥地への荒廃が進行するということであろうか。ここでは、森の伐採は、地域や国の経済をうるおし、住民に農地と伐採人夫としての雇用を提供しているということができよう。しかも、伐採は地域や方法、樹種、直径60cm以上等、期待成長量以下に規制されているのである。つまり役人の説明では、ここには熱帯林問題はないことになる。しかし、それはここが近年になって伐採が始まったからであり、フ

イリッピン等の禿山の経験に学んだからでもある。さらには丸太輸出を禁止し、合板等の製品のみ輸出可として産業を育成し地元の雇用を拡大しつつある。森を犠牲にして、経済の離陸がおきようとしていると見ることもできる。しかし、現実はどうだろうか。本当に地域の経済自立に役だっているのだろうか。

伐採現場が年々奥地になり、新たな伐採地域が東端のイリアン方面にまで展開しつつあるのも、現実には材となりうる巨木の森がカリマンタンから減少しつつあることを示している。それに、荒廃地が実際に増えている。伐採跡地に入った人達は焼き畑に最初は稲を蒔いて収穫する(写真1)。そのまま放棄することもあり、商品作物のコショウを栽培することもある。コショウは虫がつきやすいと言って、除草剤、農薬等を使用し、地面をむきだしにする。10数年使用すると放棄され、やがて焼き畑もできないアランアランの草地になる。そして確実に荒廃した土地が増えてゆく(写真2)。

結局、森の犠牲が地域の自然の許容量を越えているかどうか、回復不可能なほどに土地が荒廃しているか、遺伝子資源や種の多様性が保持されないほどに原生林が分断され、減少していないかと言って環境としての

森の保全が問題なのである。しかも、こうした課題は科学的に検証可能なものでありながら、未だ十分には理解、研究されていない面でもある。ここまで議論がくると、多様な環境問題にも当てはまることが多い。例えば、山国信州での観光開発と観光資源、つまり自然そのものの保護をどう両立させるかも同じであろう。

サマリンダ市に集中する30近い合板工場は全インドネシアの半分近いという。工場見学で見た合板はまさに日本の建築現場でみるコンパネであり、熱帯林と日本経済とが直結していることを改めて実感させられた。コンパネの使い捨ては日本では減少しつつあり、ここへの注文も減っていると言う。しかし、今だに原木伐採量は減る傾向にはなく、多様な木製品として輸出に回されていると言う。今日もマーカムの川にはたくさんの船が行き交い、合板や露天堀りの石炭、養殖のエビ、籐細工の二次林に多いロタンなどたくさんの熱帯の製品が日本や世界に運ばれてゆく。それらをながめつつ、人間活動を集約している経済という力の巨大さと、実際につながっている世界の自然がその経済の力でより緊密急速に連関させられていることを改めて考えさせられた。 1991. 1. 1.

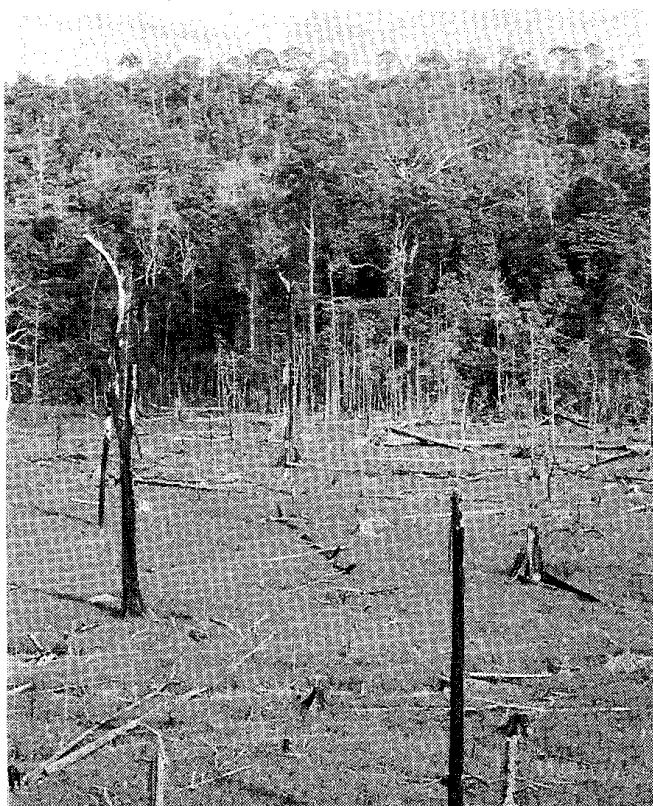


写真1：伐採後の焼畑に稲が茂る（バリクパパン近郊）。



写真2：除草剤、殺虫剤、肥料によってつくられるコショウ畑が急速に拡大している（バリクパパン近郊）。